

「井上先生」との思い出

弁護士 上里 美登利



当事務所の井上博隆先生が、昨年7月にお亡くなりになった。

これが最初で最後だと思う。元イソ弁の私は、ふと、井上先生とのことを書いてみたくなった。本来は、事務所外の皆さまにお読みいただく文章のため、「井上先生」と呼ぶことも不適切なことは承知しているが、本稿に限り、多方面にわたる失礼をご容赦いただきたい。

井上先生と私の出会いは、私が弁護士登録し、当事務所に入った平成16年10月。

少なくとも、事務所に入って1ヶ月間は、仕事が辛くて逃避的に司法研修所の教室を思い出していたことを覚えている。井上先生から最初にガツンと言われたのは、おそらく2〜3日目、今となっては、話の内容は思い出せないが、おそらく、何気なく「先生、これはどうしたらいいですか?」と聞いたのだと思う。それに対して言われたのは、「自分の答えを持たずに来んといて。」そのときは落ち込んだと思うが、それ以来、自分なりに調べて、考えて、これと思う回答を付けていくことにした。

弁護士登録してから何年かは、井上先生の下での案件に加え、自分1人でやっている案件や弁護士会の委員会での仕事も多く、毎日深夜まで仕事をしており疲労困憊。しかし、仕事さばきも決して早いとは言えず、井上先生としてはご不満で、「ちょっと話がある。」と呼び出しを受けた。その後、1ヶ月ぐらいは、出来るだけ井上先生に会わないように時間をずらすという、今思えば意味のないことをしていた記憶だが、その後、どうやって関係を正常化したのか、今では全く覚えていない。

その後、私も当事務所のパートナー（共同経営者）にさせていただいたが、井上先生との関係では、イソ弁的な立場は変わらなかった。ただ、たまに、「上里さん、この書面、見てくれるか?」と言われるようになった。

私も少しキャリアを積み、企業のCS（品質向上委員会）の取組みのような位置付けで、若手の社員さん向けに、仕事に臨む姿勢について講義をして欲しいとご依頼を受けたことがあった。

その講義の場で、「自分なりに考え、調べて結論を出してから、上司に相談する。」「自分の案件として考える姿で臨み、案件について自分として責任を持つ。」とい

うようなお話をしたところ、「その心構えはどうやって身に付いたのですか?」と聞かれたが、おそらく井上先生の厳し〜い指導の賜物でしかない。

もともと、井上先生は、これほど若輩者の私であっても、きちんと調べて自分の考えを持っていくと、それを邪険にすることは決してなかった。たとえ、井上先生の見解と違っていても、「先生、私はこう思いますが、いかがでしょうか?」と言うと、腹を立てることは決して無く、私が持ってきた見解について一緒に考えてくれた。だからこそ、私は、若輩者であっても自分の見解を持ち、また、自分の見解に責任を持つという姿勢を持つことができたのだと思う。自分もいつかそのような弁護士になりたい。

いろんなことがありすぎて、井上先生に対しては、最後まで、「感謝しております。」とも言わなかった。今でも、「感謝しております。」は何か違うような気がしており、どんな言葉がぴったりくるのかは今でも分からない。ただ、私は、イソ弁時代でも、井上先生にイソ弁として使われたという記憶はない。自分が井上先生に育ててもらったことは間違いはないと思っている。



井上先生の還暦祝いの御礼に頂戴した、1対のシーサーの片割れ。これも懐かしい思い出。(1匹行方不明。ある日、どこかから出てくると思われる。)